わが国最初の医学雑誌

谷津三雄・鈴木　勝

宮武外骨は、その著『文明開化』の雑誌篇（大正十五年六月五日発行）の医事雑誌（二～三頁）に次のごとく記載している。「明治二年十二月に大阪医学校で編纂発行した日講記聞というのが医学雑誌としての元祖であるらしいが、前にも記せるがごとく実物未見であるから除くことにして、此の医事雑誌を祖とする。編輯者坪井信良は、蘭方医師で幕府の侍医をも勤めた人である。此の雑誌の実物は、富士川游先生より寄贈された初号から第五号までの五冊合本を所有するのみであるが其合本表紙に「共八」とあるので四十号まで継続したものと察せられる。」とある。

また中野操著『皇国医事大年表』の明治六年の文献の項に「坪井信良　和蘭医事雑誌ヲ発刊ス、海外医事ノ抄録ニスギザレドモ月刊医事雑誌ノ始トス」と記載し、また藤井尚久編『医学文化年表』も明治六年の項に「坪井信良『医事雑誌』を刊行す。（我国医事雑誌の嚆矢）」と記されており、いずれも坪井信良編医事雑誌をもってわが国、最初の医学雑誌としている。しかし、発行月日は明記されていない。そこで私蔵の医事雑誌の第一号の発行年月日をみると、坪井信良編輯医事雑誌、明治六年十一月、初白斉蔵版とあり、第二号と第三号は明治六年十二月、第四号と第五号が明治七年一月、第六号と第七号が明治七年二月、第八号と第九号が明治七年三月、第十号が明治七年四月とあって、明治六年十一月の第一号を除いては毎月二回発行されていたことがわかる。

一方、田代家塾開版、文園雑誌第一輯の発行は明治六年六月、文園雑誌第二輯は明治六年七月で田代基悳輯であるが、第三冊（第三輯と記されていない）は田代基徳纂輯文園雑誌第三冊とあり、明治六年十二月二十五日。第四冊も田代基徳纂輯文園雑誌、第四冊と表紙に記されているが発行月日の記載はない。そこで、この両雑誌の発行月日を比較すると、「文園雑誌」の第一輯が明治六年六月、第二輯が同年七月なので、坪井信良の「医事雑誌」第一号の明治六年十一月より、はやいことになり、田代基徳の文園雑誌を

もってわが国の医事雑誌の嚆矢としてよいのではないだろうか。

（日本大学松戸歯学部）

大槻玄沢と西賓会話

山形敏一

大槻修二の編纂した「追遠会誌」（明10刊）によれば、磐水翁著訳書目のなかで、「其名ヲ伝ヘテ其書ヲ存セサル者」七部のなかに、『厚生新編』と並んで『西客対話』を記している。

昭和五十三年日蘭学会が刊行した大槻玄沢の「西賓対晤」は「大槻文庫」と「静嘉堂蔵書」の蔵書印があり、静嘉堂文庫の許可を得て復刻したものである。表紙裏には「西賓対晤自寛政甲寅至文化甲戌、校合可致事」と記されており、甲寅来貢西客対話、戊午来貢蘭客通弁、壬戌来貢三回対談、文化丙寅蘭人対談記、庚午西賓対話記、甲戌春対話記の六部より成り立っている。

すなわち、大槻玄沢は寛政六年（一七九四）五月四日、五日、商館長（カピタン）Hemmij, 書記（シキリバ）Ras, 医官（オップルメイストル）Keller と対談、寛政十